

優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「みくちゃんの笑顔」

神奈川県・横浜公立学園高等学校2年 上野真由子

みくちゃんは二十歳です。知的障害のため、話すことや一人でトイレに行くことができません。

彼女とは、今年の夏にボランティアで訪れた静岡県のあるデイサービスセンターで出会いました。そこでは、彼女のような成人した重度知的障害者を対象に、日常生活の補助や他者との交流支援を行っています。所属するキリスト教団から派遣された、私を含む六人の女子中高生は皆、こうした施設の訪問は初めてでもとても緊張していました。どきどきしながら利用者さんひとりひとりにあいさつするなかで、ひととき若い女性に自然と目が行きましました。それが、みくちゃんでした。

みくちゃんは私たちが声をかけると、嬉しそうにバタバタと手を動かしました。それから突然両手を組んで人差し指を立て、「バーン！」と銃を撃つ仕草を私たちに向けてきました。私たちが揃ってきよんとしたのは、言うまでもありません。しかし、彼女が必死な顔で仕草を繰り返すので、「撃たれたふりをすればいいのかな？」と首をかしげながら、とりあえず皆でその場に倒れこむポーズをとりました。それを見たくみくちゃんは大喜びで、すぐに私たちを立ちあがらせてはまた撃ってきました。私たちがソファで休憩していても構わずに「バーン！」を続けるみくちゃんにうんざりしてしまう時もありましたが、彼女があまりに楽しそうなので、結局私たちは何度も何度も同じ「遊び」を繰り返しました。

「遊び」の間に、みくちゃんは時折不思議な仕草を見せていました。人差し指で自分の唇を二、三回たたくというものですが、私以外は誰もそれを気に留めていませんでした。私はこの仕草が気になって仕方がなく、ずっと意味を考えていました。彼女も私の関心に気づいてい

たようで、私と二人きりになった時は頻繁に仕草をしていました。何かを伝えたいのだとはっきりわかりました。彼女の気持ちに伝えたいと一生懸命考えた末に、私は彼女がいつもこれを何かの仕草の直後にしていたことに気づきました。

「もしかして、『私にも同じことをして』ってこと？」

みくちゃんはうんうんと頷き、とびっきりの笑顔になりました。目尻がきゅっと上がった、とっても可愛い顔でした。

それから、私たちは急速に仲良くなっていきました。お茶目で人懐っこい彼女は頻繁に職員さんにちょっつかいを出したり、ボランティアにかくれんぼを仕掛けたりしていました。私の手を、絶対に離さないぞとばかりに強く握ったまま。私も次第に、彼女の仕草から色々なことに気づき始めました。お尻をずらして座っているから、トイレに行きたいのかな。廊下を指さして力強く腕を振っているから、追いかけてでもしたいのかな。

初めのうち私は、会話ができないことに心の奥底でやきもきしていたところがありました。しかし時間が経つにつれて、「言葉が無くても、相手を理解しようと思う心があれば通じ合える」と強く思うようになってきました。私は彼女と、笑顔という共通言語でつながることができたからです。普段は気恥ずかしくてなかなか人の顔を直視できない私ですが、言葉がちゃんと伝わっているかを確認するためにも、みくちゃんには意識して目を見て話しかけました。その度に彼女はにっこりとほほえみ返してくれ、そのおかげで私も自然な笑顔で彼女と接することができました。私たちの笑顔は、互いを思いやる笑顔でした。

彼女と一緒に半日過ごして、たとえ相手が障害者でも、笑顔が心かけ、誠意をもって向き合うことでコミュニケーションは成り立つのだと学びました。大切なことを教えてくれたみくちゃんの笑顔を、私はずっと忘れません。